巻頭言

Do What You Can Do For Others

三村　將　Masaru Mimura
日本精神神経学会理事

ゴールデンウィーク中の爽やかなある日，友人の画家である堀川理万子さんの個展を見に銀座の和光に出かけた．堀川さんには，これまで僕が会長を拝命した2019年の日本安全運転・医療研究会（現在は学会）や，昨年の日本認知症学会/日本老年精神医学会の合同開催のときに会のポスター・チラシの絵を描いていただいた．画家ではあるが，絵本も多く手がけており，2021年に『海のアトリエ』という絵本でBunkamuraドゥマゴ文学賞を受賞されている．絵も絵本も独特の色遣いと温かみのあるタッチで僕はとても好きである．今回の個展の出品作品もどれも素敵だったが，そのなかで特に僕が心を打たれたのは「いちご弾」という小品である（本誌電子版に画像を掲載）．戦車が弾を続けて撃っている…というと穏やかではないが，葉っぱでできた戦車がいちごの弾を撃っているのである．いちごと草花は堀川さんの絵によく登場する定番のモチーフである．日本認知症学会/日本老年精神医学会のポスターで使わせていただいた「実りの星だったら」という絵では，花が咲き乱れる緑の地球のまわりをいちごが飛んでいた．葉っぱの戦車がいちごの弾を撃っているなんて，彼女にしか思いつけない秀逸なアイデアだ．後で堀川さんにうかがったら，これは彼女の精いっぱいの反戦の気持ちなのだと話してくれた．

同じころ，たまたまテレビを見ていたら，B’zの稲葉浩志さんがインタビューに答えて自身の作詞についての思いを語っている場面があった[1]．そのなかでイラク戦争当時にリリースとなった「あの命この命」（2004）という楽曲に触れて，「（前略）正直言ってしまうと，自分が一番根本の問題を解決する力はないと思っています．ただ，『これってまずいよね』という当たり前のことを歌によって，人と共有できればと．（後略）」と話していた．先日亡くなった坂本龍一さんを例に挙げるまでもなく，稲葉さんも他の多くのアーティストも反戦の気持ち，願い，祈りを楽曲に乗せている．

今の時代，われわれは反戦のために何ができるであろうか．反戦のためのデモに参加したり，あるいはウクライナ支援に寄附をしたりすることもできるだろうが，むろんそれだけではない．そしてこれは稲葉さんも番組のなかで話していたように，命について考えさせられるのは何もイラクやウクライナの戦争に限られたことではなく，新型コロナウイルス感染症のパンデミックでも，事件でも自殺でも，そして人一人ひとりの病気でも，何でもありだ．さまざまな事象に触発されて，絵や曲が生まれてくる．われわれ精神科医もそれぞれの立場で，毎日の生活のなかで，やれること，やるべきことがあるのだと思う．2016年に亡くなられた僕の恩師の本多虔夫先生（当時は横浜市立市民病院神経内科部長，のちに病院長）は僕が市民病院のレジデントを終了するにあたって「Think What You Can Do For Others，Do Not Think What Others Can Do For You」と添え書きをしたウェブスターの医学辞典を餞にくださった．僕はいつもこの言葉を座右の銘にしている．自分のやっている毎日の診療や教育，研究がひいては反戦，誰かのためになっていることにつながっているのだと考えたい．

1）NHKニュースウォッチ9（2023年5月1日）（https://www.nhk.jp/p/nw9/ts/V94JP16WGN/blog/bl/pKzjVzogRK/bp/p1b5mX98Dn/）（参照2023-05-26）

タイトル：いちご弾

作　者：堀川理万子　　サイズ：33.4×21.2 cm
制作年：2023 年　　材　料：キャンバスに樹脂絵の具